



淡座

江戸にまなび、

音と言葉のあわいをえがく

淡座（あわいざ）は、現代音楽、クラシック音楽、日本の芸術文化を行き来し、文化の古今と東西をつなぐことを目的とした、クリエイショングループです。

私たちは、様々な日本の文化のなかでも、とりわけ、江戸文化から学ぼうとしています。江戸文化独自の発想のもと、「形のないもの、目に見えないもの」、つまり、言葉、文化、哲学、思想など、ひとの生活を豊かにするものの在り方を模索し、作品や演奏として発信しています。

「バッハの場」今後の開催日程

2021年10月23日(土)

11月20日(土)・12月18日(土)

会場……安養院 瑠璃光堂（東京都板橋区東新町2-30-23）

詳細は、淡座ウェブサイト、SNS等で更新してまいります。

入場料：各回 2,000円（限定60席）・配信チケット：各回 1,000円

メール：info@awaiza.com ・お電話：080-4091-6491



◀ 次回のご予約はこちら

配信チケットのご購入はこちら▶
本日の演奏をアーカイブでもう一度お楽しみ頂くこともできます



淡座リサイタルシリーズ Vol.2
無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ・パルティータ全曲
無伴奏チェロ組曲全曲演奏会

バッハの場
第3回

日時 2021年9月18日(土)
16:30 開場
17:00 開演

会場 安養院 瑠璃光堂

淡座
AMATZA
三瀬 俊吾（ヴァイオリン）
竹本 聖子（チェロ）
桑原 ゆう（作曲）

今回は、本條秀慈郎はお休みです

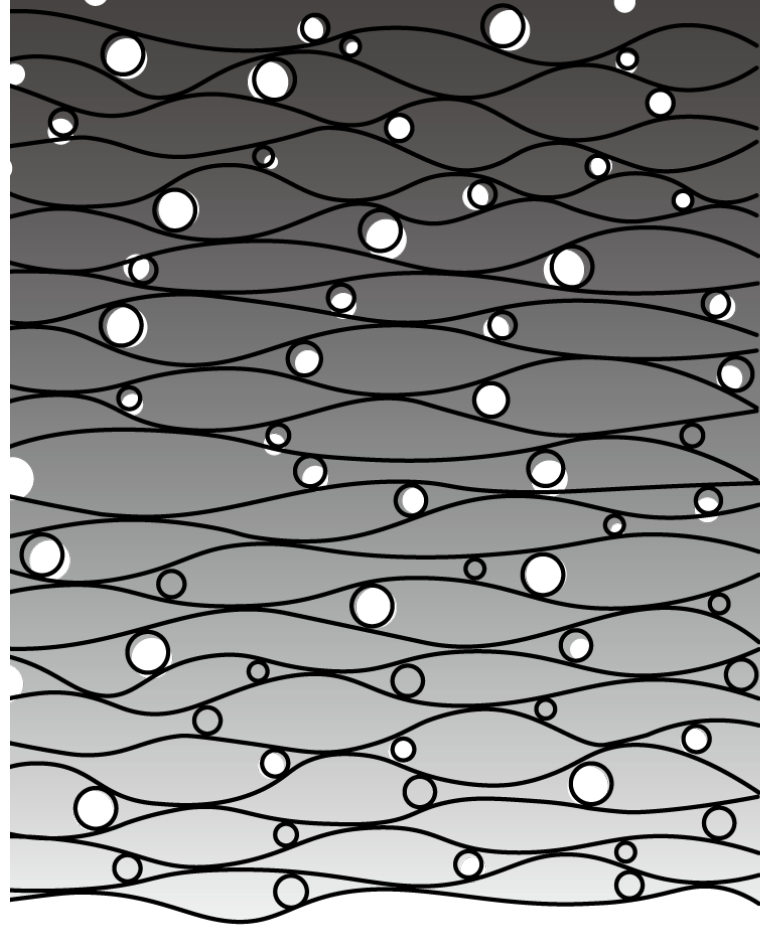
映像協力／株式会社たんとら
宣伝美術／桑原ゆう
主催／一般社団法人淡座
共催／安養院

場 12画

ジヨウ(チャウ)
ば・にわ

易は玉(日)を台(二)の上に置き、玉の光が下方に反射する形。易は霊の力を持つと考えられた玉によって、人の精気を盛んにし、豊かにする魂振りの儀式をいい、その儀式の行われるところを場という。また神を祭るところを場と

いった。
(白川静「常用字解」平凡社より)



感染症対策のひとつ「人と人との接触を最小限に留めること」を逆手に取り、独奏を追求するリサイタルシリーズ。

ひと月に1回ペースの全6回公演で、三瀬と竹本が、バッハの無伴奏全曲演奏に挑戦。桑原作品を組み合わせたプログラムで、ふたりの独奏を存分にご堪能いただけます。第6回は、ゲストとして、安養院にゆかりのあるフルート奏者、瀧本実里さんをお迎えします。

各回、アフターイベントで作品や演奏をさらに深堀りし、次の回につなげていきます。第3回以降、安養院内庭園舞台での演奏も検討しており、バッハの「場」を淡座ならではの視点で、多角的に追求する試みです。

● 曲目と解説

前半の山場となる第3回。アフターイベントは、院内庭園舞台に場をうつし、身体表現とのコラボレーションで、「バッハの場」を体現します。

J.S. バッハ／無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ 第2番 イ短調 BWV1003

- 第1楽章 Grave グラヴェ 4/4 イ短調
- 第2楽章 Fuga フーガ 2/4 イ短調
- 第3楽章 Andante アンダンテ 3/4 ハ長調
- 第4楽章 Allegro アレグロ 2/2 イ短調

ソナタ第1番同様、伝統的な教会ソナタの形式で、四つの楽章のテンポは、緩一急一緩一急で構成されている。

第1楽章のGraveはイタリア語で「深刻」を意味し、半終止という不完全な終わり方で、続けて第2楽章に入る。フーガは主題が短くシンプルなので、頻繁に登場し、複数の声部がめまぐるしく入れ替わる。第3楽章は唯一の長調で、この調性の構造もソナタ第1番と同じである。全体を通して、旋律と伴奏の二役以上を演奏し続ける。第4楽章は16分音符で構成され、エコーが多く表記されている。

無伴奏ヴァイオリンのための全六曲は、バッハの自筆譜が残っているので、すべての音やスラーなどを確認できる。全曲を通して謎は散見されるが、個人的には、この2番のソナタの第1楽章、第4楽章の終わり方をとても不思議に感じており、どう演奏するか今も思いを巡らせている。

(文／三瀬 俊吾)

J.S. バッハ／無伴奏チェロ組曲 第3番 ハ長調 BWV1009

- 1. プレリュード 2. アルマンド 3. クーラント
- 4. サラバンド 5. ブーレ 6. ジーグ

第3番の組曲は、再び長調の作品。

プレリュードの冒頭は、ハ長調の音階が華麗に提示され、そこから流れるように、16分音符のパスセージが滲みながら広がっていく。音の流れに合わせた変幻自在なボウイングは、聴きどころのひとつ。

その後、五つの舞曲が続く。語りかけるように始まるアルマンドは親しみやすく、散りばめられた32分音符の動きがとても愛らしい。

いきなり、ジェットコースターのような下降から始まるクーラントは、音の大胆な跳躍や、長短入り交じるスラーが愉しげ。

ここで少しひと息。ゆったりとしたサラバンドは、大波小波が交互に押し寄せる様が心地よい。ハ長調ならではの開放弦が活かされた和音は、教会の鐘のように響きわたる。

ブーレは、第1番のプレリュードに次いで親しまれている曲で、素朴なブーレ1と、短調の旋律が美しいブーレ2が対になっている。

組曲の最後は、快活なジーグで締め括られる。

(文／竹本 聖子)



桑原ゆう／水の声 (2014-15/19)

《水の声》は、泉鏡花の短編小説作品『海の使者』からインスピレーションを得て書いた、ヴァイオリン独奏のための作品です。

橋がきしむ音なのか、^{おかしな}魚の鳴き声なのか、「きりきりきり、きりりりり」という奇妙な擬音が、微妙に変化しながら繰り返され、水の流れを呼び寄せる。と、たちまち渦を巻くように幻想的な光景がわっと立ちあらわれ——たかと思うと、すでにそれは遠ざかり、あとに残るは月の光ばかり。

「きりりりり」「きり、から、きい、から」「さっ、さっ、さっ」など、『海の使者』に用いられた擬音を拾い集め、それらをそのままヴァイオリンの音に翻訳するようにして作曲しました。

のちに、この独奏曲を再構成してヴァイオリン独奏パートに用い、《影も溜らず》という、アンサンブル作品が出来上がりました。2019年7月19日、東京オペラシティリサイタルホールで開催した「影も溜らず—淡座リサイタルシリーズ Vol.1」で、前半の最後に演奏した、わたしの代表作のひとつです。

(文／桑原 ゆう)

「バッハの場」第2回までの演奏曲

J.S. バッハ／無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ 第1番 ト短調 (BWV1001)

J.S. バッハ／無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第1番
ロ短調 (BWV1002)

J.S. バッハ／無伴奏チェロ組曲 第1番 ト長調 (BWV1007)

J.S. バッハ／無伴奏チェロ組曲 第2番 ニ短調 (BWV1008)

J.S. バッハ (桑原ゆう編曲)／主よ、人の望みの喜びよ
(カンタータ第147番「心と口と行いと生活」より) 二重奏

桑原ゆう／玉と鍵 (2020) 二重奏

桑原ゆう／花のフーガ～滝廉太郎「花」を主題としたフーガ (2019) 二重奏

桑原ゆう／演奏会用組曲「セロ弾きのゴーシュ」(2019) チェロ独奏